

2-11 想定外のトラブル（工程大幅遅延の恐れ）への対応

1. 立場と仕事

建設会社で様々な現場経験を積んできたが、特にダム工事に専門的に取り組んでいたことだった。重力式コンクリートダムの建設に、工事所所長（現場代理人）として携わっていた。内容は、堤体工（コンクリート製造・打設他）と原石山（骨材採取・製造工事）一式の重力式コンクリートダムである。

2. 遭遇した事態

技術提案のテーマがコンクリート打設工程の短縮で、会社としても工期短縮を至上命題としていた。ところが、コンクリートの打設進捗率が52%に達した時、骨材を運搬するベルトコンベヤ（技術提案によるもの）が突如損傷し、打設工程が大幅に遅延することとなった。ベルトコンベヤによる骨材輸送が不可能になったことで、コンクリート打設工程が約1ヶ月遅延することが予想され、また、技術提案不履行の恐れが生じた。

ベルトコンベヤの損傷は突風が原因ではないかと想定されるが、明確には確定できず、的確な対策案を立案しづらい中、様々な困難な課題を前にしてどのような対応を行うべきか苦慮するところとなった。

- ・設備復旧稼働まで約1か月要する見込みとなり、残工程10ヶ月の間に1か月（約10%）の工程短縮をしなければならない。
- ・施工トラブルと今後の工程逼迫による、現場の士気（雰囲気）を低下させない。
- ・技術提案が不履行の場合、遅延1日当り多額のペナルティが発生。かつ復旧に関わる追加費用により工事原価悪化が想定された。
- ・工程確保のために設備復旧を急務とした場合、代償として労働災害の発生リスク増大が懸念された。

3. 対応内容とその結果

まず、本支店・現場全社体制で、発注者対応と原因調査・再発防止対策にあたった。ところが、何故このようなトラブルが発生したのか、明確な原因究明ができない。そこで、仮設備ではあるが設計荷重の見直し等の安全率アップを行い、あわせてより確実な点検方法・測定頻度等について体制強化を図った。

次に、工程を遅らせないための取り組みである。設備復旧期間中においても、ダムコンクリート打設の主工事を中断させないように、代替策として骨材のダンプ直送運搬ルートを確認しコンクリート打設を進めた。

そして、気を配ったのが現場の士気低下対策である。危機的な状況だからこそ、社員および協力業者との意思疎通や対話を行い、関係者の意思統一を実施した。また、復旧関連の費用負担は現場代理人である自分が責任をもって対処すると決意を示し、安全第一で復旧工事を完了させるため先頭に立って指揮をした。

これらにより、目標達成のためひとり一人が努力し、全員が一丸となって工期短縮を成し遂げ、無事故・無災害で予定通り打設完了式を迎えることができた。